

- 特集1—— 対談
北陸の活力ある地域づくりについて
- 特集2—— 建設技術報告会
- 特集3—— けんせつフェア北陸 in 新潟 2017

63 2018.1



▲新潟市：旧藤原家別邸



会員各社名

アイサワ工業(株)	オリエンタル白石(株)	大成建設(株)	東洋建設(株)	(株)北都組
青木あすなろ建設(株)	(株)加賀田組	大日本土木(株)	戸田建設(株)	(株)本間組
あのみ建設(株)	鹿島建設(株)	大豊建設(株)	飛鳥建設(株)	前田建設工業(株)
(株)安藤・間	(株)熊谷組	(株)竹中土木	西松建設(株)	(株)丸山工務所
石黒建設(株)	五洋建設(株)	田辺建設(株)	日特建設(株)	三井住友建設(株)
岩田地崎建設(株)	佐藤工業(株)	鉄建建設(株)	日本国土開発(株)	みらい建設工業(株)
(株)植木組	清水建設(株)	東亜建設工業(株)	(株)福田組	名工建設(株)
(株)大林組	(株)銭高組	東急建設(株)	(株)フジタ	りんかい日産建設(株)
(株)大本組	第一建設工業(株)	東鉄工業(株)	(株)不動テトラ	若築建設(株)
(株)奥村組				



63 2018.1

発行 一般社団法人 日本建設業連合会 北陸支部 広報委員会

〒950-0965 新潟市中央区新光町6番地1(興和ビル7F) TEL(025)285-8886

印刷 新潟中央印刷

〒950-1446 新潟市南区庄瀬6541-1 TEL(025)372-1334

2018.1.22 発行



63 CONTENTS

- 1 VISION
「技術革新による生産性向上を」
- 2 随想
「海のあるスイス」を目指して
- 3 特集①
対談
北陸の活力ある
地域づくりについて
- 10 特集②
建設技術報告会
- 11 特集③
けんせつフェア北陸 in 新潟 2017
- 13 素敵な女性
「女性技術者として」
- 14 エッセイ
『百食撩乱』
- 15 ゆうたいむす
●「ご縁を大切に」
●「“デザイン”で地域の価値を高める」
●「ある日突然～検診しましょう。」
- 17 私のプライベートタイム
「明日への活力、
リフレッシュタイム」
- 18 事務局だより

表紙の写真：富山新港から見た立山からの朝日

「技術革新による 生産性向上を」

㈱大林組 北陸支店
執行役員支店長
多尾田 望
Nozomu Taoda



昨年10月に第4次安倍内閣が成立し、「人づくり革命」と並んで「生産性革命」が政策の看板として掲げられています。2050年には生産年齢人口が5,000万人(全人口の51.5%。2011年は63.8%)になると言われている日本にとって、国際競争力を保つためにも生産性の向上は喫緊の課題であると言えます。

他産業と比べても建設産業は高齢化が進んでおり、作業員の3人に一人は55才以上というのが現状です。国内建設市場を見ると、2017年度見通しで52兆円、対GDP比率は9.5%の見込みです。この市場規模を維持するためには、若手技能労働者の確保と合わせて、現場の生産性を抜本的に上げていく必要があります。

国土交通省は、2025年までに建設現場の生産性を2割向上させるとして、ICT活用を推進するi-Construction(アイ・コンストラクション)の取り組みを進めています。

官民を挙げたICT活用の機運が高まる中、技術革新の代表格として考えられるのは、あらゆるモノをインターネットにつ

なが「IoT」と人工知能「AI」です。IoTの活用としては、作業員や重機の位置情報を利用した施工管理の取り組みなどが既に始まっています。また、ドローンによる3次元データの計測は今後大いに活用が期待される技術です。AIの分野では、例えばトンネルの切羽評価にディープラーニングを応用する技術や、工事写真から工程の進捗を確認する技術などが生まれてきています。

これらの技術革新により、省力化による生産性の向上や、より創造的な仕事への人員のシフトが見込まれます。さらには、ICT建機を活用した遠隔施工による危険作業の軽減や、ウェアラブルセンサーを着けた作業員の健康データ計測・健康管理等により、きつい・汚い・危険の3Kと呼ばれた建設業のイメージ改善ひいては担い手の確保にも繋がっていくものと考えられます。社会のインフラを支える建設業の使命と魅力を若者にPRし、建設業の持続的発展を図るためにも、今後も官民一体となって技術革新を強力に推し進めていかなければなりません。



「海のあるスイス」を 目指して

富山県土木部長
加藤 昭悦
Syouetu Kato



平成27年3月の北陸新幹線の開業から間もなく3年を迎えますが、乗車人員は開業前の3倍近い高い水準での利用が続くとともに、観光客の増加や、大型商業施設や物流拠点の進出など、様々な開業効果が現れています。中でも、県内主要宿泊施設における外国人宿泊者数は開業効果に加えて継続的な官民を挙げた観光プロモーション効果もあり、平成28年は約22万9千人(対前年比114.5%)で、4年連続で過去最多を更新しました。

県としては、この新幹線の開業効果を一過性のものとせず、持続・深化させることはもちろん、今後ますます増加が見込まれる訪日外国人旅行者を的確に取り込んでいくことが重要だと考えています。

また、本県は、標高3,000m級の立山連峰から水深1,000mを超える富山湾までの高低差4,000mを、幅40kmから50kmの富山平野がつなぐというダイナミックな地形を有しており、世界に誇る観光資源等があります。富山の魅力、強みをさらに磨き、世界水準の「世界遺産五箇山合掌集落」、「立山黒部」などの山岳観光に、「富山湾」の魅力を重ねることにより、「海のあるスイス」として、旅行者から選ばれ続ける観光地となるよう、官民一体となった取り組みを進めています。

そして、その特色のある地形から、世

界有数の急流河川が何本も存在し、昔から幾度となく河川が氾濫したため、先人達は持てる知恵や技術を駆使しつつ、治水や砂防に懸命に取り組んできました。その代表例が立山砂防であり、世界的にも高い歴史的・文化的価値を有しています。こうしたことから、本県では、「立山・黒部」地域を「防災大国日本のモデル-信仰・砂防・発電-」をテーマに世界文化遺産登録を目指しています。昨年11月には、我が国を代表する近代砂防施設として既に重要文化財に指定されている白岩堰堤に本宮堰堤と泥谷堰堤を追加し、「常願寺川砂防施設」として重要文化財に指定されたところです。さらに、12月には、日本イコモス国内委員会が後世に残したい「日本の20世紀遺産20選」を発表し、県内から「立山砂防施設群」が3番目、「黒部川水系の発電施設群」が4番目に位置付けられたところであり、世界文化遺産登録に向けて、大きな前進となりました。引き続き、国際シンポジウムの開催や本年10月に開催予定の国際防災学会富山大会(インタープリバント2018)などを通じ、国内外へその歴史的価値と魅力の発信や、理解を深めるための活動に取り組んでまいります。

また、富山湾は平成26年10月にユネスコが支援する「世界で最も美しい湾クラブ」への加盟が承認され、国際的な評価が高まっているところです。この

加盟を契機として、富山湾や立山連峰などの美しい景色を眺めながら県内を横断する「富山湾岸サイクリングコース」の整備・拡充や新湊マリーナについては、昨年5月に新たにクラブハウスや、18m級の大型船を安全に上下架する能力を有する日本海最大級のクレーン等が完成したところです。さらに、陸上保管ヤードの増設を行い、一層の施設の充実を図ることとしています。そのほか、マリンスポーツ等の振興(国内最大規模のヨットレース「タモリカップ富山大会」の3年連続開催など)、外航クルーズ客船の誘致など、さらなる魅力向上を図るため、国際的ブランド「富山湾」を活用し、幅広い取り組みを展開しているところです。こうした中、富山湾のクラブ加盟5周年を迎える平成31年に、日本で初めてとなる湾クラブ総会の開催が本県に内定しました。

今後とも、「立山黒部」や「富山湾」の国際的ブランド力の向上や国内外への魅力発信につながる取り組みを推進し、交通インフラの充実による県内外の広域観光の促進と県内滞在時間の最大化を図るなど、外国人旅行者の誘致に努めてまいります。



対談

日本建設業連合会北陸支部長

河本克正

Katsumasa Kawamoto

【日時】
平成29年11月14日(火)
15:45~17:00

【場所】
白山会館2階 明浄

北陸地方整備局長

小俣 篤

Atsushi Omata

今回は、本年7月に就任された北陸地方整備局長小俣篤氏と、日建連北陸支部長河本克正氏による対談です。局長ご就任以来4ヶ月を経てのご感想や、北陸の地域づくり、担い手確保等についていろいろと、お話を伺いました。

対談要旨

- ①北陸地方整備局長ご就任4ヶ月を振り返って
- ②H30年度予算について
- ③北陸の活力ある地域づくりについて (i-Constructionの普及・推進)
- ④担い手確保(週休二日の実現に向けて)について
- ⑤建設界の広報活動について
- ⑥日本建設業連合会への要望について
- ⑦災害対応について

小俣 篤氏 略歴

- 昭和59年 4月 建設省 採用
- 平成11年 4月 同 中部地方建設局 庄内川工事事務所長
- ◇ 18年 7月 国土交通省 河川局河川環境課 河川環境保全調整官
- ◇ 22年 4月 同 河川局 河川環境課 河川保全企画室長
- ◇ 25年 7月 同 近畿地方整備局 河川部長
- ◇ 26年 7月 同 近畿地方整備局 企画部長
- ◇ 27年 7月 同 水管理・国土保全局 河川環境課長
- ◇ 29年 7月 北陸地方整備局長(現職)

①北陸地方整備局長ご就任4ヶ月を振り返って

(日本建設業連合会北陸支部長)

北陸地方整備局長にご就任(H29.7.7)され、まもなく5ヶ月を迎えられます。この間に地域の知事、自治体首長や建設業界の方々から様々なご意見やご要望をお聞きしていることと思いますが、この間を振り返って頂いて、北陸地域のご印象などをお聞かせ下さい。

(北陸地方整備局長)

25年前に、金沢に2年弱勤めさせていただいた経験しがなく、今回初めて新潟に赴

任したわけですが、実際に着任してみると、以前に抱いていた北陸地域というイメージがだいぶ変わってきたというのが実感です。

一つは、北陸地方整備局管内のコアの3県、新潟・富山・石川を想像して、何となくコンパクトというイメージを持っていたのですが、日本海に沿って広いというより非常に長いという印象があります。そこに河川の流域を入れれば、長野県とか福島県、山形県を含め、コンパクトと言うよりむしろ大変広い地域を所管しているというのが実感です。

もともと北陸というと富山、石川あるいは福井という文化圏があって、どちらかというと新潟は北信越に位置づけられ整理されること

が多いと思いますが、富山と石川、新潟というのは、一つ一つ違った特徴を持っているというのが、もう一つの印象です。

特に、北陸新幹線が開業して、金沢は観光も含めて非常に賑わっている中で、新潟の賑わいが少し落ち着いているとおっしゃる方が非常に多いわけですが、新潟は面積が広大で人口も多く、1次・2次産業もしっかりしているという印象があります。今の金沢の賑わいは、これまで用意周到にやってきたものが結実しているという感じがしますし、富山はいろいろな意味で非常に頑張っており、何とか地域を盛り上げようとしている感じがして、各々に特徴があると思います。そう

いった中で、これから整備局が社会資本整備の中で地域に対しどういったお手伝いが出来るのかに思いをめぐらせてきたところが、この4か月過ごしてきた中での感想です。

(日本建設業連合会北陸支部長)

私もこちらで5年目ですが、北陸新幹線ができた後、富山、金沢が非常に元気になって、若干新潟が落ちこんでいる感じがします。

(北陸地方整備局長)

多分それは、富山、金沢が賑やかに見えるだけであって、新潟は“どん”としているというのが正解ではないかという気がします。北陸新幹線は上越も通っているので、新潟にも北陸新幹線の効果が、これからじわりと出てくるのではないかと思います。金沢から富山、そして上越妙高へと、新幹線効果は着実に出てくると思います。

②H30年度予算について

(日本建設業連合会北陸支部長)

8月末に公共事業関連費が約6兆円規模で、国土交通省関連の来年度予算の概算要求が行われました。来年度の北陸地域における主要なプロジェクトである大河津分水路の改修事業や日沿道、利賀ダム建設事業についてお聞かせ下さい。

(北陸地方整備局長)

全国的に見て公共事業は、この数年は安定軌道で、北陸も今年度(平成29年度)は昨年度比1.02という予算により着実に整

備を進めているところです。大きなプロジェクトとして治水関係では、大河津分水路の改修、利賀ダム建設、いずれも緒についた段階ですが、予算が厳しいので、なかなか大きな進展に到っていないというのが実態だと思います。

大河津分水路はこれから本格化の状況で、利賀ダムでは大きな橋梁がほぼ完成する状況になってきました。ダム本体の整備という点では先の長い仕事ですので、しっかりと予算を確保していくことが大事だと考えております。

日沿道も今年着工式を迎えることができたわけですが、日本海沿岸で残されたミッシングリンクの解消、東北との道路ネットワーク強化のため、しっかりと予算を付けていかないと長期間の事業になってしまうので、今の安定軌道にとらわれることなく、その必要性を訴え地域の応援も頂きながら、予算の確保が大事になってくると思っております。

新潟、富山、石川という地域を支える上での道路ネットワークとしてはまだまだの感があり、しっかりと足腰ができていない感じがしない。その一番大きな要因は雪による冬期間の交通網の不安定さだと思います。関越道が先行的に開通し、北陸道も4車線ですっきり整備され一応3県を繋ぐ軸はあるのですが、磐越道、上信越道、東海北陸道が全て暫定2車線で、日沿道の新潟・山形県境部も整備し始めたところという状況です。他地域との広域のネットワークをしっかりと構築することが、北陸地域における非常に大きな課題

だと思います。地域高規格道路についても、例えば富山と岐阜をつなぐ国道41号、山形と新潟をつなぐ国道113号、こういった南北の地域間をしっかりと繋ぐことによって、物と人の流れをつくり出していくことが、北陸地域にとって非常に重要だと思います。治水面では、大河津分水路や利賀ダム等の基幹施設をこれから整備するという段階、社会資本の足腰を鍛えるというところで、まさに胸突き八丁にいるというのが、今の北陸地域が置かれている状況ではないかと感じています。

(日本建設業連合会北陸支部長)

大河津分水路の改修事業は、これまでも非常に大きな災害を起こしてきた河川氾濫に対する対策であり、先人が築いてきたものをリニューアルするというもので、数十年に1回リニューアルしていく必要があると思います。

もう一つ、今おっしゃった日沿道は、3.11の東日本大震災の教訓として日本海側のミッシングリンクをなくし、太平洋側の代替となる広域道路交通ネットワークの構築を目指していますが、もう少しスケジュール的に早く進んだらいいなと思っています。

(北陸地方整備局長)

おっしゃるとおりで、大規模災害時の広域的な交通の確保が重要です。とともに、日本海側に位置する地域の課題は生産性を上げること、すなわち生産性革命だと思います。これは何も建設業だけではなく、日本の産業全体の生産性を上げていくことでもあります。そういった意味でも、こういう広域交通をしっかりと支えていくことがすごく大事で、高速道路網あるいは地域高規格道路網を整備することで、経済を支えることに繋がるとも思っています。

経済界の一翼を担っている日建連としても、是非この点を発信するなどのご支援をお願いしたい。我々としてはそれによってこの地域の産業を支える、あるいは観光により地域を振興させるということに繋がって行ければいいと思っています。

③北陸の活力ある地域づくりについて (i-Constructionの普及・推進)

(日本建設業連合会北陸支部長)

北陸地方整備局では、平成28年3月に「北陸ブロックにおける社会資本整備重点計画」を策定されました。5つの基本戦略を設定し北陸の活力ある地域づくりを進めて



大河津分水路改修事業



行くものと承知しております。

また、国交省では平成28年度を「生産性革命元年」と位置付けますとともに、北陸地整におかれましてはi-Constructionの推進・普及を柱として、現場での情報通信技術（ICT）を用いたドローンや建設機械による土工などの適用範囲の拡大等に取り組んでおられますが、現場における生産性向上に向けた取り組み状況などについてお聞かせ下さい。

（北陸地方整備局長）

今のお話のように、石井大臣の号令の下で、昨年を「生産性革命元年」、今年をそれを更に前に進める年として、整備局も国土交通省のメンバーとして取り組んでいるところで。

ご承知のように3つの柱として「ICTの全面的な活用」、「規格の標準化（プレキャスト化）」、「施工時期の平準化」に取り組んでいるところです。その中で北陸の特徴的なところという、一つはやはり“雪”です。冬が厳しいというのが北陸の大きな特徴だと思います。雪があり、また天候も非常に厳しく、太平洋側に比べれば冬季は晴れる日が少ない。このような背景もありプレキャスト化は、北陸地方整備局が全国に先駆けて取り組んできたところがあります。それが今般、生産性革命の中で脚光を浴び、北陸として大いに取り組んでいこうということで頑張っています。全国の他地域に比べても、現場での取り組みが進んでいるのではないかと思います。

先日、国道8号の老朽化した橋梁の改築現場に行きましたところ、橋梁の下にボックスカルバートを入れ込んで、橋を盛土構造に変えてしまう工事をしていました。非常に新しいアイデアで、画期的な取り組みだと思います。こういうことが、事務所職員の発想から出てくるところが、北陸の一つのいいところだと思います。これは、北陸地方整備局の技術力という意味でも、売りにしていくべきところではないかと思いますし、一般的にプレキャストは製品価格が高いという話がありますが、全体が効率的になることで結果として安くできるということに結びついていけるのではないかとと思うので、しっかりと取り組んでいきたいと思っています。

ICTについても、各県ならびに各県内の地元企業の皆さんの理解が非常に進んでいるのも北陸の特徴かと思えます。大変積極的に取り組んでいただいております、地元の建設業の中にも自社でICTの重機を購入されている方もいらっしゃいます。そういったと

ころも、現場の効率性を上げるということと、i-Constructionも含め、全ては担い手の確保という究極のゴールに向かって進んでいると感じています。

私が子供のときは、建設業という“カッコイイ”と思っており、「黒部の太陽」はまさにその象徴で、そういう格好良さがあったと思うのです。それがある時期、3Kみたいなところだけが強調されるようになってしまったのですが、もう一度、建設業は“カッコイイ”ということを持っていくのも、ICTの取り組みのもう一つの側面だと思っています。実際にICT土工の現場を見ていて本当に格好いいと私自身思います。高校生や大学生から現場を見てもらうと、土木の現場って面白いなという声が出てくる。そういった流れを作っていくのも、i-Constructionの非常に重要な役割ではないかと思っています。

（日本建設業連合会北陸支部長）

先日開催された「けんせつフェア」で、屋外展示の自動運転機械の運転席に上がってみました。法面を掘削する機械が実際に自動で運転されるということは、数年前まではどこまでできるのだろうかと思っていたのが、今、現実にも実用段階に入っています。

昔の土木屋が一生懸命に手で操作しながら、腕に技がないとできなかったようなものが、コンピュータでゲームをやるように、いろいろな仕事ができるようになった感じがします。そうすると、若い人のモチベーションも違うところでキュッと上がってくるわけです。「あ、面白そうだ」ということになり、CIMを使って図面を書いてみよう。そして書いた図面どおりに現場で機械が動いて物ができあがる、この辺をもっと高校生あたりにPRしていけば、もう少し担い手の方も違う目で建設業を見てくれるのではないかと考えています。

（北陸地方整備局長）

砂防現場のような地形が厳しい現場では、無人の重機をオペレーターがオペレーションルームで遠隔操作している例があります。オペレーターを女性が担当しているケースもかなりあって、その光景は、まさにロボットのアニメーションみたいなもので、憧れであった世界が、本当に現実の中で起きている時代になったと思うのです。その点では、“カッコイイ”職場になりつつあるのではないかと、今一度憧れの職業になれるのではないかと期待しています。

（日本建設業連合会北陸支部長）

本当に綺麗な作業服を着て、綺麗な格好をしたまま現場の作業もできるし、いろいろ

な形で施工管理もできる、そういう時代に今変わろうとしている矢先かなと思います。

（北陸地方整備局長）

しかも今、若い人がやりがいを感じられる仕事として“物をつくる”“社会に役に立つ”、というマインドが高くなっているのではないかと、学校の先生からもお聞きします。まさに土木の仕事は、地球に直接関わりながら住みやすい社会を築いていこうか、時には自然をより高めていこうか、そういう仕事であるわけです。自分の技量でそれを実現していくという、ある意味、職人的な部分もあるので、是非そういった仕事の世界として再構築し、ICTによって担い手がさらに確保されていくことに上手く繋げることが大事です。ただし、まだ緒についたところですので皆さんと共に乗り切っていきたいと思っています。

（日本建設業連合会北陸支部長）

実際にICTの活用に向けて、基準類の見直しとか、いろいろな作業も現実的にされていると思います。実際に工事もそのような条件で発注されていますし、北陸地整管内では、かなり有効に使われています。管内にあるICT建機やソフトウェアのメーカーなどと一緒に自動運転技術を取り入れている部分もありますし、非常にそういう意味では北陸はいい環境だと思っています。

またプレキャストは、先ほど局長がおっしゃったように全国で一番進んでいると思います。やはり雪というものに対し工期とか品質確保のためにやっているわけですが、雪がなくても、他のところで使えるアイデアが必要だと思います。

（北陸地方整備局長）

現場は、どうしても地形・地質的な特徴がそれぞれあるので、なかなか規格化が難しかったところがあると思いますが、今日までに技術は進化してきている。一方で人口が減っていくというのは間違いのない事実です。この様な状況下においてできるだけ効率的な方向に持っていく事が大事だと思いますし、コストの障壁はどこかで乗り越えていくことが必要だと思います。

④担い手確保（週休二日の実現に向けて）について

（日本建設業連合会北陸支部長）

平成27年3月に日建連が発表いたしました建設業の長期ビジョンにもありますように、100万人規模の大量離職時代の到来を見据えて、90万人の新規入職者の確保、生産性向上による35万人の省人化といった具体

的な目標を掲げました。建設業界の担い手確保・育成には、いわゆる「新3K（給与、休日、希望）」という魅力を与えられるような勤務環境と処遇改善が必要であると考えております。特に、昨年末から政策課題の一つに「働き方改革」推進への迅速な動きが出ております。日建連の取り組みにつきましては、時間外労働の適正化に向けての自主規制に取り組むとともに、週休二日として「原則土日閉所」の実現に向けた行動計画を本年末までに策定することとしています。公共事業においては、週休二日による施工が可能となるような環境整備や適正な工期設定などお願いしているところです。

日建連の取り組みにつきまして、一層のご理解とご協力をいただきたいと思っておりますので、何卒よろしく願いいたします。

整備局において週休二日による現場の施工が可能となるような具体的な取り組み状況等についてお聞かせ下さい。

（北陸地方整備局長）

先ほどの生産性革命も、担い手確保に通ずるということを申し上げました。例えば、大量離職者に対してどれだけ新たな雇用をしていくか、ということを考えなければいけません。一時、外国人の労働者を…という話も出ましたが、まず大事なことは、日本の人口の半分は女性であり、女性がいかに活躍できるようにしていくかということ、大きな鍵ではないかと思えます。

新3Kの中に休日と給与がありますが、我々土木建設の世界の常識を、もう一度変えなければいけないのだろうと思います。女性が半分いる職場というのは、私が役所に入った時には考えられない世界でした。政府の方針もあって、役所では今、三割の女性を雇用せよといった掛け声の下で新規採用をしてきており、現場の事務所にも20歳代の女性が増えてきています。仕事のやり方、人員配置や職場の組織構成、そして就業環境が今までと同様でよいということにはならないでしょうし、そこを新たに構築していくのがものすごく大事だと思っています。女性の活躍というのは前から言われていたわけですが、本当に腰を据えて、本気でやっつけなければいけないと思います。

働き方改革というのは、担い手の確保にとって非常に大事な鍵ではないかと思えます。そして週休二日については、若い人たちに“建設業も普通の職場である”と思わせるようにしていかなければいけないと思います。

（日本建設業連合会北陸支部長）

そうですね。普通の職場にしなければいけないですね。

（北陸地方整備局長）

『うちのお父さんだけ何で土曜日働いているのか』と言われないようにしていくことが、一番の眼目だと思います。

デパートの人も土日働いていますが、ちゃんと別の日に休めているわけなので、建設業も普通の職場にして行くという大きな流れが重要だと思います。ICTで効率を上げ、プレキャスト化で効率を上げるということに歯を食いしばって頑張れば、結果として全体としてのコストもいずれ下がっていくと思います。

（日本建設業連合会北陸支部長）

そうですね。使えば使うほど安くなってくれますよね。

（北陸地方整備局長）

技術は日進月歩ですので、そういう中で週休二日というものを、できるのかではなく、しなければならぬという状況です。揚げた旗をしっかりと振り続けて、現実のものとして実感できるようにしていくことが重要だと思っています。

（日本建設業連合会北陸支部長）

日建連が毎年出しているハンドブックにいろいろなデータを取めているのですが、この中に労働賃金とか、労働賃金生産性などを20年に渡ってグラフにしています。労働賃金がいろいろな産業の中で一番安い方で、労働時間は圧倒的に一番上で、労働生産性にいたっては全産業の平均の半分くらいと、データの的にはそういうデータになっています。こういうデータが世の中に普通に出てくるような状況では、一般の人もそう思っているのだろうなということなのです。長く働いて残業しなければいけない、でも賃金は安い。その上、生産効率が非常に悪い現場。若い人はこういう資料を多分、目にしますから、そういうものを変えていかなければ、なかなか入職をしないだろうと思います。

局長がおっしゃられたように、一番良いの

は女性でも気楽に入れることです。私も同感で、小学生くらいの子供を連れてお母さんが現場に入ってきてても危なくないような現場にすれば、誰でも現場で働けるだろう、と以前言ったことがあります。女性が来て、普通に現場の中を歩ける、トイレや更衣室が使える、が標準だと思います。まず、その辺にきちんと目線を合わせてやっていかないと、どこかまだ他とはちょっと違うということになると思います。特別な意識を持って女性が来られる現場を作ろうという状況があるのですが、女性目線で進めるというのは非常にいい発想だと思います。

（北陸地方整備局長）

今のお話で、やはり安全が当たり前の現場でないといけないと思います。職場で人が亡くなるということは、これは普通の社会ではあまり考えられないことだと思うのです。仕事をしている中で亡くなってしまうということが我々の頭の中ではあり得ること、のような意識がまだあるのだと思います。

（日本建設業連合会北陸支部長）

現場は特別なところで、ちゃんと訓練された人しか入っちゃいけないという意識があるのですが、実際はそうではなくて、親子連れでも、現場の足場の上を歩いても絶対落ちたりしないというくらいのことをやっていかなければいけないと思います。

（北陸地方整備局長）

とにかく安全で、それが現場の当たり前になっていくことはすごく大事なことだと思います。少なくともそうでないと、職業として楽しそうだと思うことはなかなかないわけです。

（日本建設業連合会北陸支部長）

実際に働く人はプロフェッショナルで、訓練された人が来て、それは安全だけではなく、品質や工程管理とか色々なことをやっているわけですから、そういう意味でプロフェッショナルなのですが、実際に現場に入ってきて、一般の人が見て不安になるような現場



ではいけないし、汚いと思われるのもいけないと思います。やはり、そういったところからやっていかなければいけないと思います。

もう一つは、労働賃金の問題もあって、日雇いの人が多いので週休二日にすると賃金が減るというような議論もあって、我々日建連の会員企業と協力会社の間で、賃金、休み方についてももう少し議論を進めていかなければいけないと思っています。それは我々の使命だと日建連側も思っていますので、是非、国土交通省には絶え間なく旗を振っていただきたいと思います。

(北陸地方整備局長)

とにかく、実際に取り組んでみなければ具体的な課題も出てこないし、また実感もできないと思います。その上で、正のスパイラルというか、前向きなフィードバックを常にやり続けて、過半数が実感できるような状況を作っていくことが大事だと思います。ご承知のように、国交省では週休二日のモデル工事を始めており、取り組みにインセンティブを与えるといった試行ですが、旗を振り続けることが大事だと思います。週休二日にすると、例えば工期が延びる、コストが上がる、あるいは企業から見れば利益が落ちるというようなことに対して、みんなが上手く受容できるような形にしないと過半数の状況にはなっていないと思います。

例えば、賃金のみを上げれば上げるほど同じ工事をするのに事業費が増えるわけで、これだと、世の中から理解が得られるのか?ということになってしまふ。そこで、1人当たりの生産性を上げて週休二日も確保する、理解を得る上ではこれらの取り組みが表裏一体の関係にあると私は思っています。この解決の方向を、日建連の皆さんと共に見出しながら拡大していくことが大事で、旗はとにかく振り続けなければいけないと思っています。

(日本建設業連合会北陸支部長)

国土交通省からモデル工事がたくさん出ていますし、新潟県からも週休二日のモデル工事が出始めていますので、もう少し市町村あたりにもご指導いただきながら、大手ゼネコンが参加する工事と、地方自治体の発注で地元の会社が参加する工事と、それぞれの企業によって若干の思惑とかいろいろな差がありますので、やはり広く一斉にやらないといけないと思います。

実際に現場で働いてくれる協力会社の方は我々の仕事以外にもいろいろな仕事をやっていて、土日働いている。一方、我々だ

けが土日は休もうと言っている。こういうバツキが起こってもいけないので、できるだけ県、市町村にも広く働きかけていただけるようお願いしたいと思います。

(北陸地方整備局長)

建設業を営んでいる方々は、何とか週休二日にしたい、しなければいけないと思っておられると思います。その思いの元は、やはりそうしないと若い人が入ってこないということが大きいのだと思います。我々もそう思っています。結局、週休二日によって、給料が下がるとか、工事が進まないのでは?という恐れみたいなものがある。そこは、みんな、全体として飛び越えていかないと、うまく前に進まないし、その意味では国も自治体もないのだと思うのです。ただ仮に、公共工事全部が週休二日になったとしても、民間工事があり、むしろ民間工事の方が多いわけですから、公共工事で休んでいる時に民間の工事をやっているようでは結局意味がないので、そこは是非、日建連も知恵を出していただいて、どうやったら施主に受け入れてもらえるか、また社会に受け入れてもらえるようなアイデアを出していく必要があると思います。

例えば、今マンションを買う人は耐震対策のような見えない部分をすごく意識されています。これが一つのヒントではないかと思えます。品質に対して社会が非常に意識しているわけです。最近になって鉄の問題とかも出てきているわけですが、見えなところの安全に注目した場合、突貫工事で造ったマンションと、しっかりと休みを取りながら作ったマンションとどちらがいいですか?のような問いかけ等、世の中に受け入れていただけるような取り組みをしていかないと、建設界全体としての解決には至らないと思っています。

結局ビジネスですから、やはり儲かるというインセンティブがないとなかなか進まない。いいことだからやりましょうだけでは、うまくいかないと思います。やはり、マーケットにそう思わせなければいけないと思います。

(日本建設業連合会北陸支部長)

我々も少し視点を変えて、民間の事業主との話しの仕方として品質や安全に対するものをPRするなどして、見方を変えていっていただかないと、今までと同じものを同じようにしようとしたら、結局同じものにしかなくなっていきませんよね。

(北陸地方整備局長)

もともと、担い手の確保を言いだしたのは、品確法ができた時であり、品質確保という視

点から始まってきているわけです。

良いものをきちんと作るという、公共施設、社会資本を提供するうえでの当たり前のことができなかったり、ただ安ければいいということではない、ということからスタートしているわけです。その点は、公共施設だろうが民間施設だろうが一緒だと思いますし、そこが一つの狙いどころでないかと思えます。ただし、それを具体的にしなければいけないので、是非とも、お互い知恵を出して進めていきたいと思っています。

(日本建設業連合会北陸支部長)

我々も厚生労働省からおおむね5年という時限措置を頂いておりますので、それに向かって週休二日が定着できるようにやっていきますので、是非ご協力をお願い致します。

⑤建設界の広報活動について

(日本建設業連合会北陸支部長)

日建連北陸支部では、安全安心な国土づくりに資するために、社会資本整備の意義とか、必要性又はそのやりがいつか、そういう理解促進を図るために、積極的に情報発信しているつもりです。土木学会新潟会と共催の「親子工事見学会」、新潟地区、富山地区における大学生を対象とした「市民現場見学会」と、毎年実施しているところですが、国土の保全(災害対応等)や地域づくりを担う魅力ある建設産業ということへの理解促進の観点から、広報というものに対して北陸地方整備局での具体的な取り組み、またはこのようにしていったらどうか、ということについてお聞かせ下さい。

(北陸地方整備局長)

まず、一時期広報というものに対して消極的な時代がありました。公共事業がグッと冷えてくる中で、余計なところにコストをかけない時期があったと思うのです。しかし、それでは担い手の確保は程遠い話だと思います。大事なことは、我々の仕事はどういうものなのかということを、しっかりと若い人達に、あるいは若い人達の親の世代の方々にしっかりと知っていただくことが重要だと思います。

一つは、建設現場。ものを作るという仕事は絶対に楽しいわけですし、出来たものは世の中に役立つものばかりです。例えば、街中のマンションの工事では、工事中は周りを囲ってしまい中が見えないようにしています。これでは囲いの向こうで何をやっているのか分からないわけです。建築物にしても同様で、皆さんの役に立つものを作るプロセス

というのは、楽しくないわけがないと私は思っています。

今、インフラツーリズムが流行ってきていて、現場を見たいというお客様が非常に多くなっていることもその証の一つだと思います。何か企画すると、ワッと人が集まってくるというような時代になってきているので、この流れを上手く使わなければいけないと思います。ただその時に、現場の人にとって余計な仕事が増えるというのは良くないわけですので、観光業や広告業などの民間の方々による知恵を上手く活かしていくことも大事だと思います。実際に、人気のある所では、観光業者の方が自ら手配してお客を呼び案内するといった現場もたくさんありますので、前向きに進めていかないといけないと思います。

それが、我々の仕事をしっかり理解して頂くことに繋がっていくのですが、とすると現場は危ないからとか、面倒くさいからとして避けてきている部分もあると思います。整備局としても見学会を開催していますが、なるべく他者の力を上手く使った流れをつくるのが、長く続けるうえでも大事だと思います。

(日本建設業連合会北陸支部長)

我々ゼネコンは、学生のリクルートに対してインターンシップ制をとっており、現場に1~2週間来ていただき、どんな仕事をしているのか見てもらったうえで、就職のときにゼネコンを選んでもらうという活動をしています。実は、協力会社の方からも最近こんな声が出てきます。『協力会社も、どこそこの工事現場で働いていて、こんな立派な橋を造りましたということを、もう少しPRしたい』といったものです。我々ゼネコンだけでなく協力会社も含めて、いろいろな形で現場のPRをしたいと思っており、特に、大学生ですと大体進路は決まっていますので、高校生とか中学生くらいに、現場を体験してもらいながら、現場の本当の姿を見もらうことを、もう少し回数を増やしてやっていきたいと思っています。

(北陸地方整備局長)

教育との連携といえますか、一緒にやるということがすごく大事だと思います。北陸地方整備局は、担い手確保・育成推進協議会を全国に先駆けて立ち上げ、学校、教育委員会や日建連も含めた建設業界、産学官が一緒になってお互いの悩みを共有しながら取り組みを進めていく形をとってきています。

先ほどのインフラツーリズムもそうですが、学校側のカリキュラムとして組み込んでいく

などして、恒常的な取り組みとしてやっていかなければいけないと思います。

(日本建設業連合会北陸支部長)

先日開催されました「けんせつフェア」で、高校生や大学生を1時間おきにバスで呼び込んで、新潟県の建設業協会が企業説明会をしていました。このような取り組みにより、実際に建設業をやってみようかどうしようか悩んでいる子ども達にとっては、それが一つのきっかけになるかも知れないと思います。展示されている機械を見て、これは面白いという高校生が数人でも出てくれば、素晴らしいことだと思います。

(北陸地方整備局長)

「けんせつフェア」は2年に1回で、かつ地域を変えての開催で頻度が少ないため、もう少し充実できないかと考えており、協議会でも議論して、地域毎に定着した取り組みにしていくことがすごく大事だと思います。ある学年の人はやったが、ある学年の人はやっていない、だと意味がないと思います。

また、今は土木系の学科のある学校だけを対象にしていますが、普通高校の生徒も、大学進学の際どの学部を選ぶかの参考にしてもらうとか、あるいは普通科の学生を採用している建設会社も増えてきているようですので、今後は、そういったところに広げていくための取り組みを強化していくことも、すごく大事ではないかと思えます。

(日本建設業連合会北陸支部長)

各地区で年1回のイベントのような形で、秋なら秋に行われればいいですが、「けんせつフェア」は2年に1回で、西部地区と新潟で交互にやっていますから、4年に1回というようなケースになってしまいます。だからそれ以外にそういう機会を何とか作るようなことを考えたいと思っています。そういう機会に、トンネル現場とか、大河津分水路の改修現場を見ていただき、正しく理解してほしいという気持ちがあります。汚いとか、きついとかではなく、今はこんなに新しい機械を使って、新しい技術を我々はこんな仕事をしているということ、子供さんが正しく理解すれば、親御さんもきちんと分かっていただけだと思います。

(北陸地方整備局長)

担い手確保については、各県の建設業協会がすごく危機意識を持っているので、ローカルにやらないとステディーにはならないので、そういうことも大事ではないかと思えます。

(日本建設業連合会北陸支部長)

是非、一般の人が来ても見劣りしないよう

にしてもらって、そういうところに一般の人が見に行くということ、もう少し機会を増やしていきたいと思います。

もう一つは、以前、私は近畿にいたことがあるのですが、奈良の大水害があったときに、うまく日建連としてPRできなかったという思いがあります。そこをうまく行うことも重要だと思っています。

(北陸地方整備局長)

私が一番思うのは、災害現場で活躍する建設業が、なぜ世の中に認知されないのかということをもっと業界側が真剣に考えなければいけないと思います。なぜ自衛隊、警察や消防が助けに来てくれるとみんなが思うのか?これは、私のつたない経験から言えば、やはりユニフォームではないかと思えます。とにかく災害関係のニュースはどんどん出ているわけで、災害が増え、そのニュースが出ない週がないくらいの状況になっています。そこで必ずユニフォーム姿の自衛隊の人、警察官あるいは消防隊員が映像として流れる。どこの自衛隊のどこの部隊なのかは分からない、何々消防署なのか分からないけれど一目して消防の人だというのが分かるわけです。だから、建設業でも、あの服装をしている人は誰なのか、建設業の人ですよということを伝えないといけないのではないかと思えます。各社がバラバラ、あるいは普通の作業服を着ていては、テレビに映ってはいるけれども背景に溶け込んでいく感じにしかありません。

国土交通省もその点を反省して、背中に“国土交通省”と大きく書いた青色のユニフォームを着て作業にあっています。そして、気がつけばいつもあの青い制服を着た人が災害現場にいる、が全国的ではなくても、少なくとも被災地の市町村の人には認識として定着するということになります。

作業着を統一するのは難しいと思うのですが、例えばビジネスでも何でもいいから、災害現場にそれを着ている人が必ず映っているとか旗が上がっていることで、あれは何だ?と思わせることが必要なのではないかと、建設業界の人に常々申し上げています。

⑥日本建設業連合会への要望について

(日本建設業連合会北陸支部長)

建設産業は、国内総生産または全産業中の一般労働者は、ともに1割余りを占めており、基幹産業であるという自負心がありま

平成29年度「建設技術報告会」

■開催日／平成29年11月28日(火) ■会場／朱鷺メッセ

「建設技術報告会」は、北陸地方における建設事業の円滑な推進を図るため、官公庁及び民間の建設会社において、新たに研究開発された新技術、新工法等を報告することにより、研究開発技術の普及を図る事を目的とし、北陸地方建設事業推進協議会の主催で、平成7年から開催され、今年で22回目を迎えました。

当日は、北陸地方整備局の渡辺企画部長が開会の挨拶をされ、(株)大林組 土木本部本部長室 情報技術推進課の杉浦伸哉氏による「生産性向上のカギはこれだ!」と題して基調講演が行われました。

また、技術報告は2会場に分かれて32技術の発表と各社の保有する33技術のパネル展示があり、日建連北陸支部会員会社からは11技術の発表と13技術のパネル展示がありました。

最後に、山下実行委員長による報告会の総評と閉会の挨拶で終了となりました。



開会挨拶(渡辺企画部長)



基調講演(杉浦伸哉氏)



山下実行委員長による総評・閉会挨拶

【技術報告を行った日建連北陸支部会員会社と報告内容】

会社名	テーマ区分	報告技術名
(株)大林組	②	水中点検ロボット(アクアジャスター搭載型ROV)の開発
鹿島建設(株)	⑥	長大トンネルにおける急速施工の取り組み
五洋建設(株)	⑤	吸水性泥土改質材「ワトル」
佐藤工業(株)	②	打音診断へのAI技術の適用
清水建設(株)	①	重量鉄筋配筋作業支援ロボット(配筋アシストロボ)の開発
大成建設(株)	⑥	自律制御型振動ローラー「T-iROBO®Roller」の一般工事適用について
東亜建設工業(株)	①	拡張現実を用いた水中可視化技術「Beluga-AR」
日特建設(株)	⑥	高い浸透性能を発揮する「極超微粒子セメント注入材料」
(株)不動テトラ	⑥	港内反射波を効率的に消波するコンパクトな没水型対策工
(株)本間組	①	港湾工事における情報化施工技術
前田建設工業(株)	①	トンネル切羽前方クロスホール弾性波トモグラフィの開発

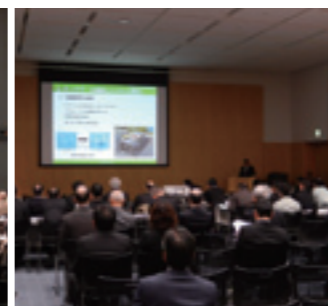
報告テーマ分類

- ① 「良いものを安く(i-Construction)」
- ② 「社会資本の的確な維持管理・更新」
- ③ 「雪に強い地域づくり」
- ④ 「自然災害からの安全確保」
- ⑤ 「環境の保全と創造」
- ⑥ 「その他」

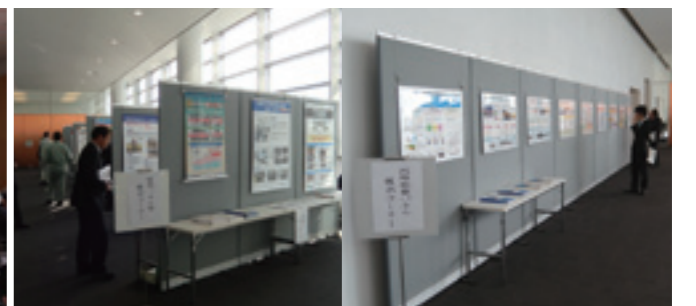
技術報告状況



第1会場



第2会場



パネル展示状況

す。特に、北陸地域というのはそのウエイトが他の地域よりも高いわけですから、重要な産業であると認識しています。

北陸の活力ある地域づくりという観点から、日本建設業連合会または建設業界に対して、ご意見、ご指摘、またはここがだめなのではないか、こうすべきではないかというお話がございましたら是非、お聞かせ下さい。

(北陸地方整備局長)

まずは、今日話題になりました担い手の確保。週休二日とか生産性革命の各種取り組みの過程においては様々な課題が出てくるわけですが、変わろうとする時代において大事なことは、やはり情報共有だと思います。

品確法の最大のポイントは、発注者と受注者を同格にしたということだと思うのです。受注者側、業界側の改善、働いている人たちのために様々な取り組みをする、その意味では発注者が勝手に思っているよりも上手いくわけがないので、生産性革命にしても担い手確保にしても、とにかく情報共有がものすごく重要だと思うのです。同じ土俵に立ち、同じ課題を共有していく必要性を、局長室に来ていただく方々には、常に申し上げています。契約は甲と乙で結ぶことから、実際に課題が生じたときに施主側に対してこれはよくないですよとは言にくいということがありますが、それではいけないと思っています。そのときには品確法の基本に立ち帰って、発注者と受注者が情報を共有し、改善していく。大きく変わる時代に一番の不幸は、片思いとか一方通行、良かれと思ってやっているのに結局上手くいっていないということを双方が認識しないと、結局、やっている方もいやになってしまい、やられている方はもっといやになってしまうみたいなことになるわけです。

日建連は全国の大手の建設業の集まりですから、下請けの思い、実際に働いている人の思いを、国に対して提供していただく上で非常にコアな組織だと思います。私は、ここがものすごく大事ではないかと思っています。先ほどの学生の話にしても、広報にしても、何が功を奏しているのか、奏さないのかということ、早めに共有しながら修正していかないと道のりが短くならないと思っています。やはり一番の大事なことは、情報共有ではないかと思ひますし、ICTにしてもプレキャストにしても、週休二日にしても、旗を振り続けていかなければいけないということは、すべて同じだと思います。是非、盟主として旗を高く掲げて業界を引っ張っていただきたい

というのが、日建連へのお願いです。

(日本建設業連合会北陸支部長)

特に北陸管内では、整備局と日建連の意見交換会、現場代理人等との意見交換会もあり、他支部とは違って濃密に意見交換をしていると思いますので、国交省の思いと我々の思いがずれていけば、毎回そこで修正していきたいと思っています。我々も働き方改革とか生産性革命については、今、国がこれだけ我々を後押ししているのだから、我々が二の足を踏んでいたのではどうしようもないという思いを、しっかりと持っていますので、毎年の意見交換で現場からの要望等をお話していきたいと思っていますので、宜しくお願いします。

(北陸地方整備局長)

もう一つ、経済界というものが、ものすごくこれからの社会資本の整備にとって大事だと思います。生産性というものは、まさにストックの効果をいかに高めていくかということだと思うので、経済界がどういったニーズを潜在的に持っているかということ、我々がいかにキャッチできるかということにかかっていると思うのです。新しいものを作っていくということもそうですが、今あるものをどう上手く使うかという点でもそうだと思うのです。そこは、制度改正なり規制緩和といったようなものが必要になってくるわけですが、国土交通省の関係では共に社会資本を整備していくという立場にあり、方や経済界の一翼として我が国の経済を支えていくという立場にもある日建連には、経済界と国土交通省のパイプ役という役割も是非お願いしたいと思っています。

⑦災害対応について

(日本建設業連合会北陸支部長)

平成27年9月には関東・東北豪雨災害があり、昨年4月には熊本地震が発生し、本年7月には九州北部豪雨と、大きな自然災害が発生しています。幸いにもこの北陸地域においては、大きな災害の被害がありませんでしたが、大規模な災害対応についての考え方や新たな取り組みがございましたらお聞かせ下さい。

(北陸地方整備局長)

ご承知のように、災害が激甚化、局地化しており、いろいろな意味で災害の厳しさが現実のものになっているというのが、この数年の状況だと思います。今年の九州の水害は、まさにその象徴的なものだったと思います。我々は当然、治水にしても砂防にしても、



鬼怒川の氾濫の被災状況(全景写真)



鬼怒川の氾濫の被災状況(拡大写真)

100年の計で着実にやっていかなければいけないと思っておりませんが、許容をオーバーしてしまう事象がどうしても起きてしまう、起こり得るのが現実です。そのときに、いかに早く立ち直るかということが、日本における一つの大きな課題だと思います。地域の建設業は真っ先に災害対応に当たっていただくと思うのですが、大規模な災害のときには日建連の皆さんの技術力、機動力が必要になるわけです。いつ、どこで起きるか分からない巨大事象に対して連携をさせていただいて、地域の早い立ち直りのために、これからも協力と連携した取り組みを続けさせていただくとありがたいと思います。そのために日頃からの準備に努め、課題についても、いろいろご相談をしながら対応等を詰めていくことが重要と思います。

お話のように最近では大きな災害がないとはいうものの、北陸も過去10年で見ると大きな地震が起きています。中越地震や中越沖地震が起きたり、あるいは火山が噴火したり、決して安心していい地域ではない状況で、たまたまこの数年起きていないだけということだと思います。私としても起きてほしくないとは思いますが、ある意味で宿命として、我が国の特徴として仕方がないと思えば、起きたときには、まず人々の命を何としても救うことだと思います。そして起きてしまった後の地域の立ち直りのために日建連の皆さんと連携して取り組めればと思っています。

(日本建設業連合会北陸支部長)

ぜひ、我々も災害については起こった瞬間に、臨戦態勢に入りますので、そこは連携をとってやっていきたいと思っています。

(北陸地方整備局長)

よろしくお願ひ致します。

けんせつフェア北陸in新潟2017

みて、ふれて、知る 新技術・新工法

開催日／平成29年11月1日(水)～2日(木) ■会場／新潟市産業振興センター



(開会挨拶) 小俣 北陸地方整備局長

(実行委員長挨拶) 渡辺 企画部長

テープカット

産・学・官の優れた建設技術を一堂に集め、技術の研鑽・高揚並びに情報の交流の場として「けんせつフェア北陸in新潟 2017」が11月1日(水)、2日(木)の2日間にわたり、新潟市産業振興センターで開催されました。

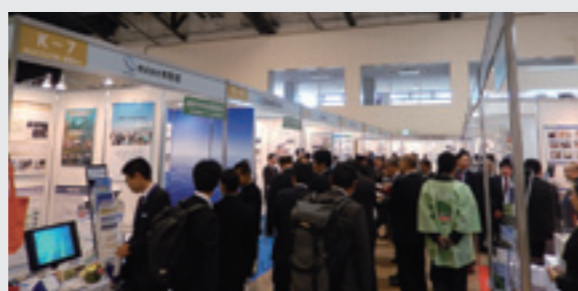
本フェアは、国土交通省北陸地方整備局をはじめ新潟県、富山県、石川県、新潟市、東日本高速道路(株)新潟支社、中日本高速道路(株)金沢支社、日建連北陸支部他の建設業団体で構成する実行委員会が主催し、13回目となる今回は「安全・安心」、「自然・文化」、「連携・活力」をテーマに152機関から326の技術展示が行われたほか、37の団体・企業によるプレゼンテーションも行われました。

日建連北陸支部からは、20社49技術について展示があり、2日間で約4,700人の方々に、各社保有の建設技術を「みて、ふれて、知って」頂くことができました。

日建連北陸支部会員会社からの出展状況

会社名	出展テーマ			出展技術名
	安全・安心	連携・活力	自然・文化	
青木あすなる(株)	○			摩擦ダンパーを用いた橋梁耐震工法 無人化施工システム
あおみ建設(株)	○		○	Re-Pier工法(伸縮式ストラット工法)、底泥分級浄化工法 KS-EGG工法(無振動低騒音式地盤改良工事工法) KS-S-MIX(大口径相対攪拌深層混合処理)工法
(株)安藤・間		○	○	安藤ハザマの「i-Construction」 フライアッシュおよび石炭灰の有効活用技術
(株)大林組	○	○		LRV工法による高架橋構築技術 マルチクローラ型無人調査ロボット
(株)加賀田組	○			H形鋼を用いたRC複合門形ラーメン橋
鹿島建設(株)		○		A4CSEL®(クワッドアクセル)
五洋建設(株)	○		○	吸水性泥土改質材「ワトル」、Color Gate System
佐藤工業(株)	○		○	下水汚泥の固形燃料化技術 AIによる打音検査システム
清水建設(株)		○	○	配筋アシストロボ、地下埋設物可視化システム、 深海未来都市構想 OCEANSPIRAL 環境アイランドGREEN FLOAT
第一建設工業(株)	○			橋脚途中定着型仮締切工法(D-flip工法)の開発 乾式吹付耐震補強工法
大成建設(株)	○			大成建設のT-iROBOシリーズ
鉄建建設(株)		○		超低空頭場所打ち杭工法、HEP&JES工法
東亜建設工業(株)	○	○		自動ベレーガ、水中バックホウ、港湾リニューアル 6軸減揺橋
東洋建設(株)	○	○		ラクテック工法、自航式多目的船の展示
日特建設(株)	○			老朽化吹付法面の補修補強技術 ニューレスプ工法 建設発生土をリサイクルするカエルドグリーン工法
(株)福田組	○			自走式覆工コンクリート湿潤養生システム シールド切替型推進工法の二次覆工一体型の開発
(株)不動テトラ	○			テトラネオ、ベルメックス、没水型港内長周期波対策構造物 キョーワ式フィルターユニット、FTJ工法 SAVEコンポーザー、CI-CMC工法
(株)本間組	○	○	○	港湾工事における情報化施工技術 ケーソン中詰め材撤去システム カキ殻を利用した生物共生型多孔質ブロック
前田建設工業(株)		○		山岳トンネル施工における調査・掘削・覆工の最新技術
若築建設(株)	○	○		RTD-INCOTEST、WIT地盤改良管理システム WIT Barge Depth 3D

日建連会員各社ブース



屋外展示



屋外ICT特設会場



出展技術プレゼンテーション



合同企業セミナー

素敵な女性

「女性技術者として」

Q. 建設業界を目指したきっかけを教えてください。

A. 幼い頃、建設会社の技術者であった父が、「この橋はお父さんが造った橋だ」と言ったのを聞き、「かっこいいな」と思ったことがありました。この思いが自分の中にずっとあったのかもしれません。大学の進路を決める際、迷うことなく自然と土木工学科を選択していました。

Q. 新潟県を就職先に選んだ理由はなんですか。

A. 地元で地域貢献をしたいという思いがありました。国家公務員は大きく地域から離れると感じましたし、市町村職員では、大きな事業ができないと感じました。県という組織の中で新潟県の発展のために頑張りたいと思い選択しました。

Q. これまで経験してきた業務及び現在の業務を教えてください。

A. 現在、県職員になって14年目になります。育児休業を2回、通算で約3年間取りましたので、11年間地域機関に在席し公共工事の設計・積算・工事監督をしてきました。主に河川や砂防事業を担当し、現在は県の目玉事業である「鳥屋野潟湖岸堤整備事業」などの新潟市内の河川改修事業に携わっています。鳥屋野潟は政令市発展のための拠点であり、堤防の設計計画などは関係機関と協議しながら進めています。新潟市中央区などは海拔ゼロメートル地帯が広がる市街地であり、治水事業は、この地域を守るために非常に重要であり、この仕事に携われたことを誇りに思っています。

Q. 仕事と家庭の両立はいかがですか。

A. 多くの人々に助けられ仕事と家庭の両立ができてきているのだと、最近強く思っています。母親が家にいなくて子どもが寂しがってないかなと不安に思う時もあります。一方、仕事を途中で切り上げなくてはならず、歯がゆく思う時もあります。毎日の保育園の送り迎えや子どもの食事は、隣に住む義父母に助けをいただき、仕事を休まなければならない場合は、職場の方々からフォローしていただいています。本当に感謝の気持ちしかありません。頼れる人がたくさんいるおかげで、勤務時間中は仕事に専念し、プライベートでは全力で子どもに愛情を注いであげることができそうです。

Q. 建設業を目指す女子学生に一言。

A. 男社会と言われている建設業界で女性が働くには大変な面もあるかもしれませんが、県の土木技術者も690人の内女性技術者は32人とまだまだ少数ではありますが、少ない人数だからこそ、32



新潟県新潟地域振興局
地域整備部 治水課

菅 友里

Yuri Suga

今回は、新潟県
新潟地域振興局に勤務され
地域整備部治水課で
ご活躍されている
菅友里さんにお話を伺いました。

人で、ドボジョ(土木女子)として活躍していくために、意見交換などを行っています。仕事や家庭の悩みを共有することで気持ちが楽になることもありました。なにより、やりがいある仕事ができる職種です。出産・育児に加え、やりがいある仕事ができるドボジョ(土木女子)の世界に飛び込んでみませんか。



「新潟って、何が一番おいしいの?」と聞かれることが一番つらい!

お米にお酒、南蛮エビ。鰯、鮭、いくら、のど黒、イカ、柳がれい。やわ肌ねぎに里芋、茄子、きのこ、えご、女池菜、枝豆。ルレクチュと柿。大判油揚げや車麩もユニークだし、越後もち豚や村上牛も存在感がある…。とにかく、こんな有様で、「ウン」と悩んだ末に「何でもあるんです。だから、なかなか一つに絞り込めないんです!」と答えてしまう。

そうなのだ。日本で五番めに大きい新潟県は、四季を通して壮大な食のシンフォニーを奏で続けているのだ。

広い平野や里山は、時代の中で丹念に手入れされ多くの食材のためのベースとなり、佐渡も含め600キロを超える長い海岸線は、豊富な海産物のためのベースとなっている。

本州中央部のしかも日本海側に位置

している点も貴重なポイントだ。対馬暖流が流れるため緯度の割には暑い夏と、日本海の湿気が季節風に吸いこまれて深い雪をもたらす冬を含めて、春、夏、秋、冬がしっかりとバランスよく繰り返されてゆく風土なのだ。

食文化面から見ても、南北に細長いため、北部、村上地域のアイヌ文化や、南部の上越、佐渡に関西、京文化の名残があり、沿岸部からは漁村、農村、里山、山村のマタギ文化が東西に連なる。

やっぱり何でもある…。視点を変えれば、これ程複雑で面白い地域は少ないかもしれない。江戸の終りから明治中頃まで、東京にその地位を譲るまで、日本一の人口を養い続けていた事実も納得がゆく。

豊かな食材に恵まれたこの地のマイナス点、それは料理技術の精度が上がらなかった事だと思う。新鮮で良い食材

がすぐに手に入れば、なるべく手をかけず素のままのシンプルなおいしさを人は味わう。料理の大黒柱でもある工夫してより美味を極めてゆく努力があまりない。さらに加えれば、おいしく見せる盛りつけや、料理の衣とも言える器選びへの心配りにも、さほど気を使わなかった。

結果、食材は選びきれない程、たくさんあるのに、代表料理となると「のっぺ」「煮菜」と極端に少なくなった。料亭のメニューと家庭のメニューが一直線につながってしまっているのだから、料理人さん達の御苦労がしのばれる。

壮大な食のシンフォニーを奏でる風土に暮らす人々はどこかゆったりとしている。

プレスが速くなり、押し出しの強さが重要視されている昨今では、ややもどかしい感があるけれど、この風土が生み出した美徳のひとつとも受けとれば、愛すべき特性と私には思える。

エッセイ ESSAY

ひやくしょくりょうらん 『百食撩乱』



ふうどスタイリスト
小島 富美子
Fumiko Kojima



経歴

- ・新潟市出身
- ・新潟高校、慶応義塾大学薬学部(旧共立薬科大学)卒、新潟大学医学部で神経生理を研究
- ・TV料理番組を担当後、(株)電通の指導を経て、1980年より「ふうどスタイリスト」としての仕事始める
- ・食(Food)と風土の親密さを原点として、広告、メディアで食や料理の制作、演出をする一方、風土関係の各委員を務めている
- ・世界各国の食文化の歴史や多様性を研究し、食の奥深さを大学等で講義している
- ・著書に、「料理とテーブルコーディネートを共に提案した「もっとうれしいいただきます」(新潟日報事業社)がある

ゆるたいむす

You Times

「ご縁を大切に」



春來軒
岡村久美子 Kumiko Okamura

海外旅行が大好きでマチュピチュやウユニ塩湖など40時間以上かけて地球の反対側にまで私は行った事があります。名所を目指して遙々着いても、極端に言うと1分で感動は終わってしまいます。同じようにそこを訪ねている旅人やガイドさん、現地の人々との出会いこそが、帰ってきてからずっと心温まる思い出になります。皆様はいかがでしょう？マチュピチュで出会った旅人は全身が虫に刺されていて見るも無惨な姿でした。聞けばクスコの町から1週間かけてインカの道を歩いてマチュピチュに行くのも欧米人にとってはポピュラーな旅の1つとの事、そういえば電車の窓からテントが見えたのは、この

事なのかと本では知りえない話を体現している人から聞くのは、その地に行って初めてわかる事です。

旅好きの私は、祖母、母、私と三代続く小さな居酒屋を営んでいますが、新潟駅に着いて、ふらっとご来店して頂けるお客様が沢山いらしゃいます。紹介でもなく、導かれるようにそして何十年も通って下さるお客様もいらしゃいます。本当に有り難い事です。お客様は北海道から九州、沖縄、奄美大島など全国と幅広く、仕事をしながら全国を旅しているようなところもあります。私にはびっぴりの仕事かもしれません。又、紹介ではないお客様のお1人が偶然にも私と同じ駐車場だったという、これもすごいご縁のお客様もいらしゃいました。面白いですね。私が旅行が好きなのは、そこに行く楽しみもありますが、人との縁がお客様と同じ状況になるからかもしれません。だからこそお客様を御迎える時は喜びと感謝を感じます。私は沢山の縁のお陰で今も頑張っていると思います。

私が3才の時に縁あって岩塚製菓さんのお煎餅のポスターに選ばれました。母がお店で見せた私の写真が切っ掛けでした。それから35年が過ぎても岩塚製菓の社長さんや

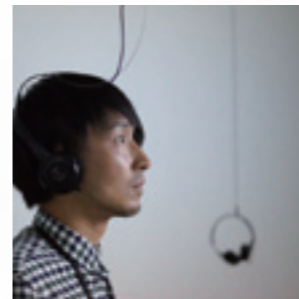
専務さんとのご縁を大切にさせて頂いております。私の想いは例え出合いが一期一会であったとしてもお客様の心の中に新潟駅前での思い出を心のかたすみにと願っているのですが、それが難しい事でもあります。最近インターネットやSNSで出合いは簡単になり世界中の人と繋がる事ができます。でも、目の前の人との縁を大切に。そういう生き方をこれからも続けていけたらと思っています。

今、話題の清宮幸太郎選手の話として中学時代に日本ハムで始球式をした所に入団する事になったそうです。これもご縁その物でしょう。

「ご縁を大切に」



「“デザイン”で地域の価値を高める」



(株)U-STYLE
松浦 柊太郎 Syuutarou Matsuura

新潟市の中心にある「鳥屋野潟」。かつては、泳ぎ回り、水を飲み、漁をした、暮らしを支える「恵みの潟」でした。高度成長期には環境悪化が問題となった潟も、多くの人の努力により環境再生は進み、人や動植物が共存する憩いの場となってきています。

私はそんな潟のほとりで、デザインの仕事

をしています。水辺まではオフィスから徒歩数十秒、普段からカヌーで遊んだり、野鳥観察をしたりと水辺の暮らしを楽しんでいます。水辺や自然は心を穏やかに、発想を豊かにしてくれます。感性が勝負の私たちにも、鳥屋野潟は多くの「恵み」を与えてくれています。

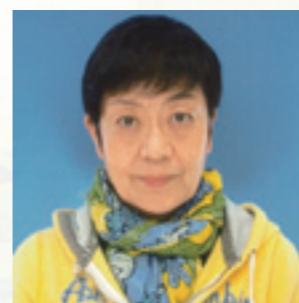
パンフレットやウェブはもちろん、デザインが関わる領域は多岐に渡り、近年ではその視点を「地域」に広げています。それも潟の文化や営みの豊かさに感動し、そんな地域資源をデザインで磨き価値を高め、より素晴らしい未来に繋げていけると感じたからです。

例えば、土地の語り継ぎ。毎年、地域にいる先人や達人を取材しそれを『潟ボーイズ・潟ガールズ』という冊子にまとめています。これらは地域の小学校で教材にも活用され、土地を伝える役割を担っています。企業にも創業の想いや歴史があるように、土地にも開

拓の歴史や長い歩みがあります。土地の人から聞く話にはまさに「土着性」があり、各時代の風景をいきいきと想像することができます。それらを丁寧に紐解く中で見える土地の本質的価値をデザイン化し、現代に伝え、後世にも繋ぎたいと思っています。他にも地域にフォーカスした様々な取り組みを行っており、この冬に開催する「とやの潟ウインターキッチン」では、潟魚や伝統野菜・地産野菜を地元シェフがオリジナルメニューで提供します。地域と人を結びつけるデザイン、その可能性にいつもワクワクしています。



「ある日突然～検診しましょう。」



フリーアナウンサー
近藤 京子 Kyouko Kondou

人間ドックで胃カメラを飲んでいるときのことだった。医師と看護師の緊張した声飛び込んできた。「先生これ!」「あ!後で組織を取っておきましょう。」そして看護師がゲージを覗いている私の耳元で囁いた。「気になる箇所があり精密検査をしたいのですが

これは人間ドックの料金外ですが宜しいですか?」この場で「嫌だ」という人が居たらお目にかかりたいものだと思います。首をカクカク縦に振った。ドックの後で医師から言われたのは、最悪の場合食道がんの可能性があったことだった。自覚症状は全く無かった。3週間後に直接結果を知らせてくれると言った。今思えばこの間が一番辛かった。季節は年末、忘・新年会シーズン。お酒を飲んでいる場合ではないという思いと、痛だったら飲めなくなるから今のうちに飲んでおこう。去年の検査は何ともなかったのだから大丈夫だろう。いや、あの慌てぶりは…声が出なくなったらどうしよう、仕事ができなくなる…とにかく不安だった。

年が明け、医師から「やはり、極初期の食道がんです。」と告げられた時の方が気が楽

になったくらいだ。だから、告知された時に「3月に友人たちと旅行を計画しているのですがキャンセルでしょうか?」などこの場に相応しくない質問が口をついて出た。するとこの女医さんは「キャンセルは何時でもできるから。新潟大学病院に持って行ってもらう紹介状にその旨を書いておきます」と言ってくれた。彼女が大好きになった。1週間前南の島に旅行に行き、前日はエアロビクスをし、日焼けした顔で入院した。

癌は突然やってくる。しかし、発見が早ければ治らない病気ではない。検診が大切なのである。青森のデータで、初期癌の4割は検診では見つからないとニュースで言っていた。つまり、6割は見つかるのである。まず受けなきゃ。

MY PRIVATE TIME

私のプライベートタイム

「明日への活力、リフレッシュタイム」



嵯熊谷組北陸支店
常務執行役員支店長
岸 研司
Kenji Kishi

<p>昨年4月に金沢へ赴任して参りました。出身は福井ですが、北陸勤務は初めてです。改めて、当地の人々の誠実な人柄や海の幸の美味しさ等に触れ、幸福度ランキングトップクラスの地を肌で感じつつ有意義な日々を送っています。</p> <p>本題に入りますが、目下単身赴任中ですので(自宅は埼玉県)、プライベートタイムを主に自己研鑽と心身のリフレッシュに充て、楽しく充実した時間を過ごしています。それでは、心身リフレッシュのための過ごし方をご紹介します。</p> <p>【ランニング】</p> <p>知人にマラソン大会への出場を誘われたのがきっかけで、日頃のストレス解消としてランニングを趣味にしています。マラソン大会に出始めて20年近くになります。ストイックにのめり込んでいた時期もあり、その頃は雨等でランニングできない日が続くとそのこと自体がストレスとなる有り様で、飲み会後も身体に鞭打って走ったりしていました。今から思うと一種の中毒症状ですね。</p>	<p>現在は、そのような状態から脱却でき、空いた時間にゆったりとした気持ちでリラックスして走っています。マラソン大会に参加したり、会社のランニング大会に参加したり、会社のランニング仲間と駅伝大会に参加したりとランニングを楽しんでいます。昨秋の金沢マラソンも走りました。</p> <p>【マジック】</p> <p>幼少の頃よりマジックに興味を持ち、大学時代に本格的に取り組みました。現在は、ステージマジックを演じる機会にはほとんどなくなりましたが、「不思議」大好きな方々に時折、30分~1時間ほどのテーブルマジックショーを楽しんでいただいています。</p> <p>【小唄】</p> <p>前任地での名古屋勤務時代に、知人の勧めもあって小唄を習っていました。キャリアは2年弱で、稽古をつけて</p>	<p>いただいた曲は40曲ほどでしたが、会派の発表会等を通して名古屋の財界の方々との交流も深めることができました。</p> <p>こちらへ転勤後は、手本の録音を聴きながら細々と独り練習を続けており、邦楽独特の発声法や唄い回しに悪戦苦闘しながらも楽しんでいます。金沢は歴史ある城下町、華やかな茶屋街もあり、芸妓さんの三味線にのせて早く実践デビューしてみたいものです。</p> <p>最後になりますが、自他共に認める無類の愛酒家の私にとって、北陸は美味しい地酒が多く、恵まれた環境です。</p> <p>休日は、早朝よりランニング、ピッチング練習(軟式野球も結構真剣にやっています)、フィットネスジムの筋トレで汗を流し、サウナでフィニッシュ。その後、まだ昼前からですが、地酒を注いだグラスを片手に、気分に応じて読書、マジックや小唄の練習などに興じる、本当に至福のひとつです。心身ともに一気にリフレッシュでき、明日への活力が湧いてきます。</p>
--	---	---

事務局だより

平成29年度の主な支部活動報告

・関係機関や会員の皆様からご協力をいただき以下の活動を展開してきました。

公共工事の諸課題に関する意見交換会

開催日/平成29年5月24日(水)
会場/ホテルオークラ新潟
内容/ゆう62号平成29年7月20日発行に内容を掲載

北陸支部定時総会の開催

開催日/平成29年5月24日(水)
会場/ホテルオークラ新潟
内容/ゆう62号平成29年7月20日発行に内容を掲載

親子工事見学会

実施日/新潟班 平成29年7月26日(水)
見学場所/新潟駅付近連続立体交差事業・大石排水区大石2号貯留管下水道工事
実施日/長岡班 平成29年7月26日(水)
見学場所/新潟防災センター・新潟駅付近連続立体交差事業
建設業の社会的使命や社会資本整備の必要性を広く知っていただくために、夏休み期間中に小学校高学年の児童とその保護者の方を対象に、見学会を実施しました。

北陸電力への本部役員挨拶

開催日/平成29年8月7日(月)
宮本土木本部長をはじめ土木本部役員と河本支部長により、北陸電力への挨拶を行い、久和代表取締役会長のご出席をいただき情報交換を行いました。

中日本高速道路(株)金沢支社との意見交換会

開催日/平成29年9月14日(木) ホームページに掲載

東日本高速道路(株)新潟支社との意見交換会

開催日/平成29年9月20日(水) ホームページに掲載

市民現場見学会

開催日/平成29年9月15日(金)
見学場所/柏崎周辺(二期)農業水利事業市野田ダム建設工事・エコパークいずもぎき第3期最終処分場土木施設建設工事
長岡技科大学学生対象
開催日/平成29年9月29日(金)
見学場所/次期廃棄物埋立場埋立地整備工事・手取川橋りょう
金沢大学学生対象

安全パトロール・現場点検の実施(10月~11月)

内容/安全環境対策委員会(安全分科会)で新潟、石川の現場パトロール。
事故防止対策委員会で本支部合同で現場の交通安全・公害防止など点検を行った。

「土木の日」記念講演会の開催

開催日/平成29年11月20日(月)
会場/日報メディアシップ
内容/新潟県内の土木遺産についての講演と辺真一氏を招いて「日本をとりまく国際情勢」と題して講演会を土木学会新潟会と共催開催。

労働災害防止安全推進大会の開催

開催日/平成29年11月29日(水)
会場/新潟グランドホテル
内容/会員会社の建設現場における更なる安全意識の高揚と労働災害撲滅に向け決意を新たにしました。

新潟労働局と安全環境対策委員会(安全分科会)との意見交換会の開催

開催日/平成29年12月5日(火)
内容/ホームページに掲載

現場代理人との意見交換会の開催

開催日/平成29年12月14日(木)
会場/白山会館
内容/ホームページに掲載



BACK STAGE 編集後記

新年あけましておめでとうございます。また、新しい年がやってまいりました。年が明けると年度末も近く、多忙な事と思います。さて、昨年を振り返りますと、またまた各地で発生した自然災害、国政選挙、Jアラートが目覚めたり…といったところが思い出されます。特に近年、毎年のように発生する台風、豪雨といった自然災害は私たち建設業界としても関心の深いものであります。災害から人命を守り、社会資本の整備を担う建設業は必要不可欠であり、日々進歩しなければなりません。昨年11月に開催された「けんせつフェア北陸in新潟2017」では152の企業・団体が326の技術者を出展し、4700人の来場者があったところです。ICTをはじめとした新技術を興味深く見学していった学生さん達の姿が多く見られたのは嬉しい事です。

少子高齢化社会が進むなか、建設業界では現場に従事する一人一人の生産性向上、担い手確保の取り組みを継続して行っています。先人の技術者の方々が現在に残してくれた技術を私たちが少しずつ進歩させてきましたが、将来、それを継承し、更に発展させていく技術者を育て、生産性を向上させて行く事が建設業には急務であると思います。日建連北陸支部広報委員会では、親子見学会、発注者と連帯した市民現場見学会等を開催し、広く建設業を理解して頂けるよう活動を行っています。災害に対応可能な国土強靱化が求められるなか、今年も魅力ある建設業を構築し、次世代に継承できるよう、広報活動を行って行きたいと思っています。本年も皆様が多幸でありますことを祈念いたします。(工藤 悟 記)

広報委員会スタッフ

委員長	細貝 隆司(五洋建設)
副委員長	岡崎 豊彦(熊谷組)
委員	昆野 徹也(安藤・間) 石附 裕(植木組) 稲田 克彦(大林組) 濱 一男(大本組) 垣内 俊彦(鹿島建設) 信清 孝樹(五洋建設) 小川 晃市(清水建設) 小林 恵一(銭高組) 和田 茂秋(第一建設工業) 岩佐 一郎(大成建設) 窪田 利晴(東亜建設工業) 津川 圭一(フジタ) 永田 健二(前田建設工業) 工藤 悟(若築建設)
事務局長	本間千代吉(日本建設業連合会北陸支部)